令和５年度第２回青森県こども未来県民会議

～第一部については記載省略～

（司会）

続きまして、第２部は、知事とメンバーの皆様との意見交換となります。

皆様のお手元には、１０月にテーマ別に開催したオンライン意見交換の内容を整理した資料と、これまでにいただいた意見などから、少子化対策「青森モデル」の方向性について整理した資料をお配りしております。

本日の柴田様の講演やワークショップの報告などを踏まえまして、皆様から、少子化対策「青森モデル」を取りまとめるにあたって、必要と考える取組の方向性や優先度などについて御意見をお願いいたします。

（宮下知事）

私が進行して参ります。

最近、ちょっと自分の癒しの時間が本からスマホにシフトしてきていて、動物の動画が結構かわいい。

もう１つ、最近よく赤ちゃんの映像が出てくる。動物と赤ちゃんの映像、その２つに最近癒されている知事です。よろしくお願いします。

本当に、毎回、毎回、皆さんと、毎回、毎回っていうほどでもないけど、議論した後に、よく妻とこういう話になったよというのを普通に会話しているんですね。そうすると、なるほどなというのがあったりとか、エッ、というのがあったりとか。いろいろちょっとあって、その中でも、やっぱり赤ちゃん動画を見ていて思うんだけど、私、本当に何もしなかったなと思って。それに凄く反省をしている昨今ではあるんですが。

今日は、さっき、先生のお話を聞いて、まだまだ皆さん、話し足りないことがあるかと思うので、そこをもう一度整理をしたいというか、感想を教えて欲しいということ。

また、先生が、さっきおっしゃっていたんですけど、青森県をどんな青森県にしたいのか、どういう価値観でいるべきか。あるいは、どんな多様性が求められるのか、どんな街にしたいのかというのは、ちゃんと女性から意見を聴きなさいという話をしていましたね。

ですから、そのあたりについて、皆さんから今日は一言ずついただいて、次に繋げたいと思いますので、発表、準備ができた方から手を挙げてください。

じゃ、お願いします。

（田中さん）

この今までの会議の資料を拝見していて、私は、第１回の時も子育ての楽しさを伝えたいというお話をしていて、意見交換でもこういう話題が出たのかなと思ったんですけど。

まず１つ、今日、絶対、知事がいる間に伝えて帰りたいなと思っていたことがあって。

（宮下知事）
皆、あると思う、それは。

（田中さん）
そうですよね。発信を、子育ての楽しい部分とか、子育てしながらでも一生懸命働いているお母さんの格好いいところとか、あと、これ１つ、前回抜けていたなって凄く反省したのが、今、結構、家に籠っているお母さんとかって、ＳＮＳとかちょこちょこ見たりしていると思うんですけど。あんな、皆、上手くいっていないんですよね、子育てって。

（宮下知事）
私が見ている動画みたいにっていうことですよね。

（田中さん）
そう。勿論、私は凄く楽しいし、子育て大好きだけど、１、２歳の時とかって、やっぱりどうしても物理的に手がかかって、心に余裕がなくなって、寝不足になって、私は今、子育て約１０年やっているんですけど、第一子の時も第二子の時も第三子の時も、１、２歳の時は、夫婦喧嘩は多いんですよ。でも、３歳ぐらいになって、何となく仲良くなってきて、今、今日、ここに来ている子は、２歳になったばかりで手がかかるから、今は結構、険悪なんですけど。でも、何だ、かんだ、それでも、多分、来年ぐらいには、また仲良くなるかなって思いながらやっていて。
でも、そういうのがやっぱりリアルだから、そういうのを、綺麗なところを見て、私はダメなお母さんだって家で思って、自分を追い込んじゃってっていう人をやっぱり減らしたいし。
一番伝えたいこととして、私は、そういう青森県でこういうふうに、皆、一生懸命トライ・アンド・エラーをしながら子育てして、格好いいところもあるし、格好悪いところもあるよという発信をしたい、やらせてもらいたい。関わらせてもらいたいなって思って、もし、そういうのを進めていくチームとかを立ち上げたりするのであれば、そこに入れてもらいたいなというのを凄く強く思っています。

（宮下知事）
ありがとうございます。
とっても前向きな話だと思います。
私も、動画を見ている、本当に見る。ＡＩがもう、私がそういうのが好きだって、次から次へと出てくるんですけど。見ていると心が癒されるのと同時に、こんな時期もあったなと

いうのと。こういうのをやっぱり、悪い部分の発信というのも勿論ある。悩みでの発信というのもある。これって、凄い、こういうのこそ良いことだなって、私も思い始めているので、是非、そういうのは、今後の政策に活かしていきたいと思います。

そういう場面では、是非、参加していただければと思います。

ただ、本当にこれ、夫婦の会話を言うと、この前、子育てのネットニュースかなんかが出ていて、お母さんが大変だという話のニュース、ご飯も食べられずに、テーブルの上で立ったまま子育てしながら食べてるって、それを見たうちの妻が、私を見て、「こんなに大変だよ」って言ったら、「こんなの当たり前じゃない」って言っていて、その後に妻は凄い反省していて、こういうことを言うから、老害だって言われるのかなって。

本当に、そういう、ちょっと世代が変わるとそうなっちゃうし、何か本当の意味で若い世代というか、次、子育てをする世代にどういう発信が求められるのかって、凄く大事なことだと思うのね。参考にさせていただきます。

本当にありがとうございます。

次、どなたか。

（小山さん）

まず、結婚に関して、いろいろこの資料を拝見しているんですけど。思ったんですが、やっぱり雇用とか若者の所得アップが一番大事じゃないかなって、私は思っていて。やっぱり給料が安いから結婚はまだできないという友人のいろいろ相談を受けたりすることがあって。やっぱり結婚すると、所得が上がるとか手当が付くとか、そういう仕組みが少しでもあれば踏み切れる方も多いんじゃないかなと思います。

あと、子育てに関してなんですが、男性も育休だけじゃなくて、時短勤務も取る世の中になって欲しいなと思っていて、やっぱり私も、育児、２歳差で男の子を２人育てていますけど、本当に家の中、殺伐として、私も毎日イライラして、怒鳴り声をあげながらという毎日を過ごしたりした時期もありまして、夫が少しでも早く帰ってくればいいな、なんて毎日思いながら・・・

（宮下知事）

今でもじゃないの。今はもう大分良くなったの。

（小山さん）

今は少し、上の子が４歳になったので、日本語が通じるようになってきたので良かったんですけど。去年、一昨年は、本当に日本語が通じない２人が家の中にいて、もう大変な毎日を過ごしていたんですが。

時短勤務、時短っていうものが難しいならば、例えば、少し朝早く勤務するとか、夜、夕方早く帰って来られるような、もうちょっとフレキシブルに働けるような仕組みとかがあ

ればいいのになと思います。
　何か、ずるずる、今の時期、忘年会が発生したりとかして、いろいろ子どものいる家庭では、夫婦喧嘩の種になったりしますけども。そういった意味でも、少し早く帰って来るだけでも、家の中は明るくなるかなと思ったりします。
　それと、あと、小児科が凄く今、大変な状況になっていて、これは、周りでも是非言ってくれということで言われてきたんですが。
　結構、青森市内の小児科で４時間待ちとかっていうことがあります。日付が変わった瞬間に予約が埋まるということもよくあって、本当に大人気ロックバンドのコンサートかっていうぐらい、日付が変わるまでスマホを握り締めて、ボタンを連打して予約を取ったりすることもあるんですけど。
　本当に小児科が足りなくて、結構、御高齢の方がやってらっしゃったりもして、この先、小児科、かかれるのかなという、結構、心配になったりもするので、何か開業費用を助成するとか、何かいろいろな仕組みで何とか小児科、それから産婦人科医も足りないということを私、取材をしたんですけど。お産ができる病院も限られてきていますから、小児科、産婦人科、もうちょっと充実する仕組みが何か制度があるといいかなと思います。
　以上です。

（宮下知事）
　ありがとうございます。
　結婚に対しての支援というのは、さっきのアンケートでも出ていましたし、どっちかというと、所得が上がるということのシナリオって描きづらいと。だから、我々は、子育て支援というか、子育てに関する費用を軽減して、可処分所得を上げていくという、多分、そういうスタイルにしかならないと。
　ただ、それが全国で競争みたいになっているのは、私はどうかと思うんですが。
　ただ、青森県はこれからも進めていくということで御理解いただきたい。
　もう１つ、時短勤務、男性の時短勤務の話は、さっき先生から出た男性の労働時間を減らすとか、働き方改革とかっていう話そのものなので、やっぱりこれは、先生は条例化とか制度化という話もありました。私自身は、制度化、条例化ということに踏み込むのか。あるいは、先生がさっき言っていたように、呼びかけ、働きかけ、感情的、あるいは共感的な議論にするのかということも含めて、これはしっかり考えていかなきゃいけないと思っています。
　小児科は、これは青森県独特の問題で、おそらく弘前以外は、全部、そういう状況なのではないかと思うんです。弘前、大丈夫でしょう。

（種田さん）
　まあまあ、なんとか。

（宮下知事）
　なんとか、そんな、４時間とか５時間とか

（種田さん）
　４時間は、さすがにないですね。１時間とか。

（宮下知事）
　１時間ぐらいでしょう。１時間ぐらいはまあね。まあねっていうのもあれですけど。
　でも、本当にそういう状況なんですよ。これ、全体の医師不足の話なので、これは、もうちょっと医師を増やすということと、配置。それから、民間の方は、なかなかちょっと、増えるシナリオ、今のところはないんですが。しっかり、そこは、私自身もよく分かっています、ということでお伝えをいただければと思っております。
　以上でよろしいですか。

（小山さん）
　ありがとうございました。

（宮下知事）
　皆さん、いかがですか。

（山内さん）
　小児科、産婦人科の流れでいくと、発達支援というところも凄く少ないと思うんです。発達障害児と呼ばれる人が認知されて、増えてきている中で、それに対するフォローというのは少ないですよね。そこも、子育ての苦しさに繋がっているのかな。そういう人たちが、２歳まで保育所に入らないで苦しんでいるよりだったら、保育所に入った方が良いというのも、さっきの柴田先生の話なのかなって、考えていました。
　私、先ほど、柴田先生に質問すれば良かったなって、でも、勇気がなくてできなかったんですけども。出生率を上げるためには、１人子どもを増やせばいいというのを０が１になればいいのか。１が２になればいいのかというところの、どっちも増えればいいんでしょうけど、どっちが増やしやすいのか。逆に県民は、どっちを求めているのか。どっちの方が有効なのかというところが、自分の中で整理されていなくて、御意見いただければなと思っていました。
　あと、最近では、大学の無償化の話になっていて、私、３人子どもがいるので、ラッキーって思っている身なんです。しかも、年の差も、ギュって産んでいるので、より受けられる対象なんですね。それを職場で話していると、年の差離れて３人産んでいる人だっているし、２人産んでいる人だっているし、そういうところの不公平感はあるよねって。「もう、知事、

そんなこと言っていないで、１人生まれたら１千万出してもらおう」と話題になり、「そうだね、言ってきます」っていってきました。そんなお話をしていました。

一気に１千万とかっていうと大変だと思うので、例えば、小学校に入る時に、年長さんでお金がかかるから、年長さんの時に５０万円。中学校に入る時に１００万円とか。県内の大学に進めたらちょっと多いよとか。お得感をもっていけたら、凄く魅力的な県になるのかなと、勝手に想像していました。

よろしくお願いします。

（宮下知事）

ありがとうございます。

医療的ケア児から始まって、発達支援、発達障害のある子どもたちへの支援というのは、認知件数が増えているのに比例して、そんなに対策が広がっていないというのが、私自身も感じています。

ですから、県の、どういう組織でやるのかということも含めて、来年度から本格的にこの課題に向き合おうと思っています。すぐに改善するかどうかあれですけど。特に学校の現場がね、凄い大変なんで、そこは凄くよく理解をしているつもりなので、これは、本格的に取り組みますと。

２つ目の０が１なのか、１が２なのかというところでいくと、どっちも同じ価値があるというふうに思っていて、今は、やっぱり３人目の壁というか、２から３が、確かに一番ハードルが高いということになっている。それか、むしろ逆に結婚がハードルが高いので、０にまで到達するのが大変だということになっているので、そこは、どこが増えても合計特殊出生率には影響するので、そこは、どこが増えても、多分、どこでも有効なんだと思います。

最後のお話ですけども、私もこれ凄い考えているんですよ。どういうふうに無償化したり支援したりしたらいいかって。現金で給付すると、子どものために使わない親もいると思うんですよね。それも、よく考えなきゃいけなくて。

これを一番最初に政府がやった時、何年前だったか忘れましたけど、自分たちの子育ての分野の職員と議論したんですよ。ともかく、早く皆に渡せよという話をして。分かりましたと。早くやりますと。いろいろ制度を構築して、「どうだい」って聞きに行ったら、いろんなことが起こるんですよ。つまり、世帯主に渡すと、そこからお母さんのところにいかないとか。ましてや子どものところにいかないとか。仲が悪い。少数かもしれませんけど。

それにもう１つは、ちょっとレベルの低い話ですけど、お父さんが全部パチンコで使って、子どもにいかないとか。

だから、仮にそういう大きなお金が動いていくことが、本当に社会全体の仕組みとして成り立つかどうか。子どもに本当に行くかどうかということをやっぱり考えなきゃいけないような気がすると。

児童手当というのも、確かに増えてくれば、さっき先生の資料でもあったんですけども、

合計特殊出生率が伸びていくというふうなことは言われていました。だけれども、何て言うか、どうやったって、その水準には国はもっていけないわけだから、まして、あれもお金じゃないですか。知らない間に振り込まれているから、知らない間に、何の生活費に使っているか分からないけど、生活費に使って、子どもには使っているかどうか分からないと。本当にそれでいいのかな、という気はするんですよね。

もしかしたら、本当に車１台の方がいいかもしれない。その方が、むしろ子どもに使われる可能性がある。

だから、そこは、もうちょっとよく皆考えなきゃいけない。私自身も考えています。ということだけお知らせします。

いかがですか。

（山内さん）

１つ言い忘れたなと思ったんですけど。一部をクーポンにして、青森の会社から買う。それを更に指定して、アカチャンホンポだけで使えるとかにすれば、子どものものが絶対買えるのかなって思いました。

（宮下知事）

そうですよね。クーポン制度にするっていうのは、１つのやり方だと、私は思っています。

ありがとうございます。

（山内さん）

ありがとうございます。

（宮下知事）

次の方、どうでしょう。

（越田さん）

今、お話いただいた０が１になるとか、１が２になるみたいなお話で、私は、０が１になる方を増やした方がいいというか、青森県で考えていった方がいいんじゃないかと思っていて、さっき、柴田先生からもお話があった、若者の住みやすい青森県にする。若者が東京に出て行って戻って来ないのは、魅力がないからっていうわけじゃないんですけど、住みにくい、こっちに戻って来て何かしたいと思えるものがない。

だから、女性にとってとか、働きやすい、若者にとって青森が魅力的な場所になっていかないと、やっぱりどうしてもここに定着して、いざ、ここで子どもを産んで育てていきたいなってなかなか思えないというところで、やっぱり多様性とかの話もあるんですけど、結婚

だけでもないし、男女だけの話でもないし、皆が皆、育ててサポートしながら生きていきやすい青森県になるために、まず若者の居場所づくりとかを進めていくことって、凄い大事だなと思っていて、ついこの間、会社の先輩が東京の方に出張で行かれて、２泊３日で行って戻ってきたら、「まあ、田舎だな」って思っちゃったって。駅を出たら思ってしまったという話をしていて、やっぱり若者がちょっと、もっと集まれる場所とか、若者言葉で言うと、「たまれる場所」みたいな場所があれば、そこで出会いとかも増えるだろうし、じゃ青森でもっと一緒に住んでいくとか、魅力的な会社もそうですけども、そういう企業とかも増やすという、根本的なところとかが大事なのかなというふうに考えました。

（宮下知事）
　それ、さっき先生が言っていたこと、そのものなんですよ。
　じゃ、具体的にどんな場所なのっていう。これ、高校生とかに聞くと、スポッチャとかって言うんだよね。ちょっと年配、皆さん方ぐらいに聴くと、コストコとかって言う。例えば、何が求められているんですか。

（越田さん）
　何ですかね。

（小山さん）
　やっぱり、働く場所があって、まず、そこが大事だと思っていて、ねぶたが好きだっていう若者、多いじゃないですか。だけど、だから青森は好きなんだけど、だけど戻って来てじゃ何で働けるのっていうところが、結構、皆、悩んでいて。
　働ける、いろんな、今はテレワークもできますし、そういったいろんな企業へチャレンジできるような、そういったものがあればいいんじゃないかなと。

（宮下知事）
　データだけ見ると、今、有効求人倍率って１以上で、仕事はある。仕事はあるけど、どんな仕事があるとか何とかっていろいろあるんですけど。仕事はあるはずだと。何を皆さんは求めているんですか。

（山内さん）
　給料じゃないですか。

（宮下知事）
　給料。

（越田さん）
　給料は低いです。

（和田さん）
　魅力的な仕事を。
　高校の教員をしているので、高校生は、休みがちゃんとあるところを選んでいる。
　正直、今の若い高校生は、あまり給料はそんなに意識していないように、私には見えます。給料は低くても、きちんと休みが取れる。推し活で東京に遊びに行けるような時間が取れるようなところを希望しています。
　あと、女の子は、やっぱりお洒落な業界で、販売とか、そういったところを希望する傾向があります。ただ、給料とか、休み、土日ないよって言うと、途端、シュンとなります。

（宮下知事）
　だから、結局は、働き方、働く場所、働き方、居場所。でも、本当にそこは突き詰めて考えていかないといけないんじゃないですか。どういう場所が必要で、どういう働き口が必要で、お洒落な業界って、それなんだよって。

（工藤さん）
　すみません。
　私は、もう大分年いっている人たちが友達ですけども。例えば、専門性の高い職場とか、それから大きな企業の人たちは、こっちにはないので、帰ってきづらいというのはあります。
　専門職とか研究職とか。

（宮下知事）
　専門職や研究職、分かりました。

（越田さん）
　すみません。
　施設みたいなのが、青森ってあまりなくないですか。昔は、それこそアウガがあって、アウガの４階とかに行くとゲーセンがあって、みたいなものが、今は。
　そういうところもない、若者がたまって話してお茶飲んで、プリクラ撮ってみたいなものがあまりない、みたいなのが、出会いもなければみたいな。

（小山さん）
　ゲーセンないですね。

（田中さん）
ゲーセンないです。

（田中さん）
たまり場の話、どうしても言いたくて。
別の県の話になっちゃうけど、以前、上の子たちを育てていたところは、家の近くに、わりと多世代で溜まれるたまり場があって、しかもちょっと洒落ている、お洒落なたまり場があって、そこで起こっているということは、凄く地域の助け合いとかに繋がっていたので、そういう場所を、作りたいなとかって思うんですけど、そういう時に、やっぱりスタートで資金が要るような、いろんなところで躊躇してしまったりするので、そういうのって、ちょっと助成金が付いたりがあれば。

（宮下知事）
そういう居場所づくりの政策というのは、全国には沢山あるし、世界中でそういうことはやっていると思うので、できると思います。

（坂本さん）
これ、何度も言っているので、知事、またその話かなって思われるかもしれないですけども、誰でも通園制度を導入するのであれば、その受け皿となり得るこども園、また学童保育の質の向上、環境などの土台づくりを平行してしっかりと行うべきだと思います。
そのために職員の人員確保、配置基準の見直し、待遇の改善を考えていただきたいと思います。
現在、こども園、学童保育は、保護者の要望の多様化、児童数の増加、発達障害児の専門的サポートなど多岐に渡り、職員の対応が、正直追いつけていないところも多いです。
また、環境的にも、狭い部屋で沢山の子どもたちが過ごすという状態のところも多いです。
丁寧で子ども目線の保育、質の高い保育というものをしていくのであれば、まず、そこを改善していかなくてはいけないと思います。制度を導入すれば解決ということではないと、私は考えています。保育現場の声をもっと聴いて、その上で制度を検討して、よりよい方向に誰でも通園制度、また保育の質、学童保育の質の向上を考えていただきたい。これはお願いです。
また、もう１つなんですけども、育休・産休を取りやすい職場にするために取得する側のサポートだけでなく、職場に残る人たちにも手当や人員の補充、仕事面での負担増にならないサポート体制をしていただければいいなと思います。
産休・育休を取る人、取らない人での心理面での分断というものを生まないようにする対策は、本当に必要なのではないでしょうか。
そこは、結構あると思います。心理面での分断というのは、やっぱり、こういう言い方を

すれば「エッ」と思う人もいるかもしれないんですけども、確実に職場では発生しているものだと思います。どちらが悪いとかではなくて、やっぱりそこは、職場の環境、雰囲気、仕事、分担、そういうものによって巻き起こされているものだと思うので、そういうのも考えていただければいいなと思います。

以上です。

（宮下知事）

ありがとうございます。

まず、今日の話で、私自身が目を開く思い、刮目したのは、先生がおっしゃっていましたね。保育というのは、親のためじゃないって言っていましたね。子どものためだって言っていましたね。これは、ちょっと、「あっそうか」と思いました。

何となく、今までの日本って、保育と、保育園と幼稚園って凄く厳格に分けていて、保育園は預かる場所で幼稚園は教育する場所だということで分けていて、認定こども園が始まったので、少しちょっと境い目が無くなったにしても、多分、そういう固定概念が私にもずっとあって。

ところが、やっぱり保育そのものが子どもの教育だというのは、１つ大きな発想の転換を私たちに迫っているなというふうに思うんですね。誰でも通園制度の話を、この前ちょっと、それこそ弘前の保育園に行って、「あおばな」って対話集会をやってきたんですけど。その時、園長が良い話をしていて、誰でも通園制度って、子どもたちのためにならないんじゃないかって言っていたんです。要するにいつもいる保育園の人たちと一緒にいるからこそ、子どもたちの安全とか、あるいは、安定、気持ちの安定が図られるけど、ポッと来て保育園に預けられても、泣いて帰って終わりじゃないかっていう。

だから、それがあるから、なかなか進まないんじゃないかなって言っていて、確かにそうだなと。

もう１つは、子ども誰でも通園制度は、まさに、今日、先生が言っていたように需要があるかどうかということが大事で、おそらく青森県内だと、多分、３市は需要があっても、他の地域はどうなんだろう、というのは、これはあるはずだし、できる範囲で、これは始めていけばいいと。

それよりも何よりも、保育に関して大事なことは、現場のゆとりがあって、子どもたちに向き合う環境をどうつくっていくかだと思っています。これ、今、教育改革の方で、先生の働き方改革でそういう議論をずっとしているんですけど。それと同じようにあてはめれば、保育や学童保育の部分でもできると思っていますので、これはしっかり進めていきたいと思います。

それから、育休・産休のサポート体制、心理面での分断というのは、これは、もっぱら本当は、私は職場のマネジメントの問題だと思うんです。職場そのものが、社長なりトップがどう考えるか、そしてどう従業員に働きかけるかということだと思うんですよ。ただ、制度

としても、どういうふうにできるかということは、これはちゃんと考えていきたいと思っていますので、ちょっと意見としては承ってます。今までも皆さんからそういう意見をいただいていますので、そこはちゃんと、私の気持ちの中にも入っています。ということだけお伝えします。

最後、種田さん、どうぞ。

（種田さん）

少子化対策で議論しているから、まずは産んで欲しいから、産むためのものがまず１つ欲しいなと思ったのと、あと、産んで終わりじゃなくて、産んだ後、その後、継続して県が取り組んでいけるようなものが必要なのかなと思いました。

何でそう思ったかというと、今、大学、３人いれば無償化という話も出ていたと思うんですけど、それって３人いれば無償化って、始めるのは凄い良いことかもしれないんですけども、果たしてそれが自分の子ども、今、産んで、１８歳になった時に政策として続いているのかなというのを凄い考えていて、１７歳までいきました、今年で終わりますって、３人産んだのになんで、となる日が、多分、来ると思うんですよ。だから、やるってなったら、継続してできるものを皆で考えたいなと思ったのと。

あと、それも私、教授みたいなことを言うかもしれないんですけど、ここに来る前に調べていたことがあって、私、通わせている保育園から、先生が足りないから、「種田さんのところで今週、休める日、ありますか？」みたいな話をされたんですよ。先生が足りないことを理由に子どもを休ませるのってどうなのかなって思って、私は働いているんですけど、今週社員いないからお客さん、休んでくださいっていうことはないじゃないですか。それを園児の保護者に「今週休める日ありますか？」って聞かれることがちょっと辛くて、でも先生にはお世話になっているから、じゃ協力しようと思って、水・木って休ませた日はあったんですけど、そうならないために日本では、０歳の子ども３人に対して先生１人とか、１・２歳児６人に対して１人とかという基準の数字は国としてあるとは思うんですけど、それをやっぱり上回る人数を県として配置できないのかなと思って、そこ、知事、お金出せないのかなと思ったんです。

アメリカの小児学会と米国公衆衛生協会によって推奨されている保育園のガイドラインというのを私、調べてきたんですけど。そこは、半年から１歳の子どもは、３人に対して先生が１人、１歳半から２歳半の子どもは４人に対して先生１人、２歳から３歳は子ども７人に対して１人という基準があるんですけど、日本って、３歳児２０人に対して先生１人とかってなっていて、２０人の中の子ども１人、何かありましたってなったら、先生１人で１９人を置いて、１人の処置に当たっているのかと思えば、やっぱり先生が多くないと厳しいのかなと思ったんです。

この間、うちの子どもが、２人いるんですけど、上の子、トイレトレーニングでトイレに行っている間、下の子がうんちをしてしまっていて、そのうんちが出たおむつを自分で脱い

でいたから、家のジョイントマットがうんちだらけになってしまったんです。私１人で２人見ていても、そういうことが起こるのに、２０人見ていたらどうなるんだろうと思ったら、やっぱり保育士は多い方がいいのかなって思いました。

実際に、これって、研究結果でも出ているみたいなんですけど、そういう少ない人数に対して、先生１人とかの方が、やっぱり言語発達の能力とかも変わってくるみたいなので、先生は多ければ多い方が嬉しいなと思いました。

（宮下知事）

ありがとうございました。

まず、１つ目のところは、継続してやれることしか多分、スタートできないというのは、まずそのとおりで、おそらく政府もそう考えていると思います、そこは。だから、１８歳になった時に、１７歳になった時に止めるという選択肢は、多分、ないと思うので、そこは政府を信頼していいんだと思います。どっちかというと、政府はそこまで信頼されてないのかって、私は思いますけど。

それと、あとは、その部分でいくと、何て言うんですかね、１８歳、大学無償化するから、子どもを産もうと思う人って、あまりいないと思う。なんかちょっと遠いんだよ。遠いと思うので、もうちょっと近いところをやっていくということは、多分、必要なんだろうと、私は思っています。

無償化するということは良いことだと思うので、それは、それでやった方がいいと思います。

もう１つ、保育園の先生が足りないというのはそのとおりで、増やさなきゃいけないと。県が独自に増やすことができるのかというと、これは、勿論、できなくはないという部分はあると思います。

ただ、やっぱり保育園側のマネジメントの問題もあるから、本当に、果たして、何て言うのかな、職員の処遇も含めて、適切にやっているかどうかということを、チェックしないといけないと思う。例えば、保育園にドーンとお金を渡しているうちの、例えば、法人に入っている部分が幾らで、先生方に入っている部分が幾らでというのは、これは、ちゃんと考えなきゃいけないし、その中で、先生方にもうちょっとという部分も当然あるんだろうし。人数が増えたからって、良い場面っていうのは起こらない。これは、質の悪いというか、意地悪な先生が一杯増えたって、それは困るわけだ。だから、一定の質が確保された中で、保育園の先生が増えていくということにしないといけないと思います。

でも、必然的に、これからはやっぱり増えていくと思います。これだけ、やっぱり需要があるし、この分野、一生懸命やろうというふうに言っているので、そこは、増える方向にしか、多分、いかないというふうに思います。それは学校の先生も含めてですけど。

そこは、そういうふうに私自身は考えているということはお伝えをしておきます。

今日、何か先生もそういう話、していましたね。結局、預けるのが教育だっていうけれども、預けてマイナスになる場合もあるって言っていたでしょう。だから、預けてマイナスになる場合

っていうのは、どういうことかというと、質の悪い保育とか学童保育が行われれば、教育以下の成果にしかならないと。だから、私たちは人数を増やすのと同時にやっぱり質をちゃんとやっていかないといけないというのをこれからよく考えて進めていきたいなと思っています。

いずれにしても、来年、子どもの部局が出来上がるということは、もう間違いないので、県庁でも。そこでしっかりそういうことも取り組んでいきたいと思っています。

以上です。

（田中さん）

いいですか。

（宮下知事）

どうぞ、どうぞ。

（田中さん）

すみません。

今の配置基準の話で１つ。

私、南部町民なので、南部町に４つ園があって、この会議に入れてもらってから、それぞれの園長先生と話す機会を持っているんですけど。その４つの園の中の２つの園長先生から出た同じ声、共通していたことがあって。それは、人を増やすというのは、少し時間がかかるかなと思うんですけど。今すぐできそうなこととして出たことで、配置基準の中に園長先生とか副園長先生が保育をしてはいけないという決まりがあるらしくて、私、ちょっと詳しくないんですけど。それを青森県独自で無くすことができないか、知事に聞いてみて欲しいということがあって。

何でかというと、延長保育とか充実したら、キャリアを大事にした女性は嬉しいんだけども、どうしても、最後の１人、２人になった子どもは、凄く寂しそうで、お母さんに早く来て欲しいとかあるんだけど。そういった時に最後まで残ったら園長先生と遊べるとか、ちょっと特別感が。この園では、最後の１人は、毎回、おやつを貰って帰っていて、そういう最後になっても、少しポジティブに捉えられる特別感を作ってあげると、子どもって凄く、今日は最後、遅めでいいよとか。だから、やっぱり親も働きたいのもそうだけど、子どもも寂しいから、そこを上手く何かちょっと、ちょっとした付加価値を作ったり、園長先生がそういうふうに柔軟にできればいいのではないかと。

（宮下知事）

どうなんでしょうか。

法律の規制なんでしょうか。

（こどもみらい課長）
　これは、国の規制で決まっておりますので。

（宮下知事）
　ちょっと調べてみます。
　ありがとうございました。
　ちょっと、約束のお時間になってしまいましたが、また、いろいろとやり取りをさせていただきながら進めていきたいと思います。
　今日は、先生のお話がありましたので、先生のお話も踏まえて、今日の出た意見を踏まえて、青森モデルというか、少し政策の方に、これから、いよいよ来年度の予算に向けて、いろんな子育ての政策を議論していくことがありますので、是非、皆さんからいただいた意見も予算化、事業化していきたいと思っています。
　言い足りないこととか、言い忘れたことは、また、メールでもなんでもしていただければと思います。
　よろしくお願いいたします。
　じゃ、事務局に移します。

（司会）
　沢山の御意見、ありがとうございました。
　次回の会議は、来年３月の開催を予定しております。
　１月から県内３か所で第２シリーズの少子化対策ワークショップを開催いたします。
　次回は、その内容をとりまとめた上で、少子化対策の方向性について、是非、皆様と議論を深めて参りたいと考えております。
　メンバーの皆様には、引き続き御協力を賜わりますよう、どうぞよろしくお願いいたします。
　それでは、令和５年度第２回青森県こども未来県民会議を閉会いたします。
　お忙しい中、お集まりいただき誠にありがとうございました。

（宮下知事）
　ありがとうございました。
　時間を組んで、またオンラインでやるかもしれませんし、また、政策の方向性がまとまってきたら、意見を聞く機会を作りたいと思います。
　ということで、今日も皆さん、ありがとうございました。